

懸川城の朝比奈氏・今川氏・徳川氏

静岡市文化財保護審議会委員/2023年NHK大河ドラマ「どうする家康」古文書考証  
大石 泰史(大石ブロンング主宰)

※この資料は本日の講演のためだけに作成したものですので、転載・撮影及びインターネットでの公表をお断りさせていただきます

はじめに

▶『掛川市史』編纂から  
四半世紀：研究の進展  
→資料編古代・中世：2000  
年刊行↔通史編：1997年  
⇒丸島和洋氏による整理(丸島2019)：「懸河  
城主」朝比奈備中守家  
の立場

☞駿河朝比奈氏の系統  
／通称に「又」字⇒花  
蔵の乱で没落したた  
め惣領家に

☞通称「弥」字・実名(=  
通字)「泰」字

☞文亀元年(1501)ま  
でに社山城(磐田市)攻  
略(宗長手記『県史』  
⑦303)／遠江北部担  
当⇔南部＝高天神城  
☞庶流＝紀伊守家／宇  
津山(浜松市)城代

☞泰能＝懸河城主では  
なく、さりとて懸河  
城代でも説明がつか  
ない＝今川家宿老と  
評するのが良い

☞泰朝＝「懸河」朱印  
の使用(後述)…懸河  
城代として領域支配  
を行う／上杉氏との  
外交にも関与／駿河

府中(駿府)逃亡後の氏真を保護↔城主：徴税等の文書見えず

→戦国期今川領国下の「懸河」：文言＝「懸河」「懸川」が多く、「掛川」は時代が降る(表参照)  
⇒永禄12年(1569)に集中：38通(対徳川・武田時代＝43+7通←51～57)／「城」関係＝21通  
〔背景〕永禄11年12月＝信玄駿河侵攻↔駿甲相三国同盟破棄…家康ほぼ同時に遠江侵攻

『戦国遺文』内「懸川」「懸河」等文言一覧

大石作成

No.	年月日	文書名	文言	出典・所蔵機関	戦今	備考
1	文明5年11月24日	足利義政御判御教書写	懸革庄代官職	広島大学日本史学研究所蔵 今川家古文書写	40	
2	(永正5年頃か)11月1日	朝比奈泰熙書状	懸河	大沢文書	236	
3	天文19年(月日欠)	輝口銘	西郷懸河山神宮寺	神宮寺旧蔵	995	
4	弘治3年8月晦日	兼安寺藏法語	懸河村城主	駒澤大学図書館蔵	2752	
5	永禄4年8月2日	今川氏真判物	從懸河	広島大学日本史学研究所蔵 海老江文書	1729	
6	永禄6年10月19日	今川氏真判物写	懸河院内	静岡県立中央図書館蔵掛川 誌稿巻三広安寺文書	1939	要検討
7	永禄11年9月21日	朝比奈泰朝朱印状(折紙)	朱印・印文「懸河」	奥山文書	2190	
8	永禄11年12月16日	今川氏真書状(小切紙)	懸河城	原原文書	2205	
9	(永禄11年)12月25日	今川氏真書状写	懸川之地	別本歴代古案十四	2218	
10	永禄11年12月28日	今川氏真感状写	懸川	埼玉県・足立文書	2222	
11	永禄11年12月28日	今川氏真感状写(切紙)	懸河	東京大学史料編纂所蔵諸家 文書所収西郷木工所蔵文書	2223	
12	永禄12年正月2日	北条氏康書状写	懸川之地	歴代古案一	2228	
13	(永禄12年)正月7日	朝比奈芳輝書状(縦切紙)	懸河	大沢文書	2231	
14	(永禄12年)正月7日	北条氏照書状	懸川之城	上杉家文書	2232	
15	(永禄12年)正月8日	武田晴信書状写	掛川	金沢市立玉川図書館蔵松雲 公採集遺稿類纂一五	2234	
16	(永禄12年)正月9日	武田晴信書状(切紙)	懸河籠城	昭和三七年十二月古典籍展観 大入札会目録	2235	
17	永禄12年正月10日	武田晴信書状写	懸河	国立公文書館蔵土佐国藝簡 集残編四	2237	
18	永禄12年正月15日	徳川家康判物写	懸川居屋敷	国立公文書館蔵記録御用所 本古文書三	2250	
19	永禄12年正月16日	由良成繁書状写	懸川へ	歴代古案一	2251	
20	永禄12年正月28日	今川氏真感状写	懸河天王小路	東京大学史料編纂所蔵諸家 文書所収西郷木工所蔵文書	2266	
21	(永禄12年)2月18日	徳川家康書状(切紙)	懸川一城	上杉家文書	2277	
22	(永禄12年)2月18日	石川家成書状	懸河表	河田文書	2278	
23	(永禄12年)2月23日	山県昌景書状(切紙)	懸川	東京都・酒井家文書	2280	
24	(永禄12年)2月24日	武田晴信書状	懸川詰陣	芋川文書	2282	
25	(永禄12年)2月26日	小笠原元詮・瀬名元世連書状	自懸河	大沢文書	2287	
26	(永禄12年)2月27日	三木良頼書状	懸河之地	上杉家文書	2291	
27	(永禄12年)2月27日	三木良頼副状	懸河之地	静岡県・村上淳子氏蔵文書	2293	
28	永禄12年2月28日	今川氏真感状写	懸河天王社路	東京大学史料編纂所蔵三川 古文書	2294	
29	(永禄12年)3月23日	武田晴信書状写	懸河	国立公文書館蔵古今消息集	2322	
30	永禄12年卯月2日	今川氏真判物写	懸河籠城	東京都葛飾区金町・高田吉金 氏蔵甘利文書	2330	
31	(永禄12年)卯月4日	大沢基胤・中安種重連署状案	懸河	大沢文書	2331	
32	(永禄12年)4月6日	武田晴信書状(縦切紙)	懸河	反町弘文荘主宰古書逸品展示 大即売会出品目録昭和五十年	2334	
33	永禄12年4月8日	徳川家康起請文写	懸川	天野文書	2335	
34	永禄12年4月19日	武田晴信判物写	懸川籠城	水府明徳会彰彰館所蔵能勢文 書	2350	
35	永禄12年4月19日	武田晴信控書写	懸川	国立公文書館蔵松平義行所 蔵文書	2352	要検討
36	(永禄12年)卯月28日	北条氏政書状写	懸川	国立公文書館蔵土佐国藝簡 集残編七	2358	
37	(永禄12年)5月朔日	武田穴山信君書状写	懸川	山形県鶴岡市致道博物館蔵 一智公御世紀巻一所収文書	2739	
38	(永禄12年)5月23日	武田晴信書状(切紙)	懸川之地	神田孝平氏蔵文書	2371	
39	永禄12年5月23日	北条氏政判物写	懸[懸]河地	国立公文書館蔵古証文五	2372	
40	永禄12年5月23日	北条氏政判物	懸河籠城	大森洪太氏保管文書	2373	
41	永禄12年5月23日	北条氏政判物(切紙)	懸河籠城	成實堂古文書百三十七	2374	
42	(永禄12年)5月24日	北条氏政書状	懸河出城	致道博物館蔵酒井文書	2376	
43	永禄12年閏5月2日	今川氏真感状写	懸河仁令籠城	滋賀県彦根市・彦根城博物館 所蔵彦根藩文書	2380	
44	(永禄12年)閏5月3日	北条氏康書状	懸川	岡部文書	2382	
45	永禄12年閏5月4日	北条氏康書状写	懸川出城	歴代古案三	2387	
46	永禄12年壬5月4日	遠山慶光書状写	懸川出城	歴代古案三	2388	
47	永禄12年閏5月21日	今川氏真書状写	懸川籠城	歴代古案一	2400	
48	永禄12年7月27日	北条氏康判物写	懸川御籠城	国立公文書館蔵古証文五	2413	
49	永禄12年7月29日	徳川家康判物写	懸川伏[依]致内通	東京大学史料編纂所蔵遠江 国風土記伝巻八	2415	
50	永禄12年11月3日	今川氏真朱印状写(折紙)	懸河	平口文書	2423	
51	永禄13年2月7日	科詮拾遺抄奥書	懸河	身延文庫所蔵	2767	
52	元亀2年卯月21日	今川氏真判物写	懸河籠城中	国立公文書館蔵記録御用所 本古文書十三	2482	
53	元亀2年卯月24日	今川氏真判物写	懸河籠城中	国立公文書館蔵記録御用所 本古文書十三	2483	
54	元亀2年9月25日	今川氏真判物	懸河/天王山一戦	島根県浜田市・江木徹氏所蔵	2489	
55	元亀2年10月14日	今川氏真判物(切紙力)	懸河へ致供籠城	滋賀県彦根市・彦根城博物館 所蔵三浦家伝来文書	2492	
56	元亀3年正月19日	今川氏真判物写	於懸河大手籠籠城	静岡県立中央図書館蔵三浦文書	2498	
57	(元亀3年)極月27日	合戦注文	懸川へ	大沢文書	2523	
58	天正2年以降	寂斎鐘状案写	懸河城辺二	神奈川県津久井町・功雲寺文	2562	
59	(天正13年)4月27日	葛山与右兵衛附陳状案	懸河へ	葛山文書	2624	

⇒今川氏真、駿府から遠江国懸川城(静岡県掛川市)へ／翌年5月＝氏真、懸川城を家康に明け渡し、氏康の庇護下に

☞武田氏・徳川氏による駿河・遠江侵攻…今川領国の不安的な時期、合戦状況によって文言が確認 ⇔ それまでは今川領国において特に問題のない地域

☞ 備中守家による支配の安定が図られていたと想定

➔ 朝比奈氏の領域支配／他大名への影響 について検討

### 1.今川氏による拡張

▶懸河城：築城・築城者＝不明 ← 朝比奈氏＝義元の父氏親の命による

→宗長手記：史料1＝大永2年(1522)・6年の普請  
↑宗長：連歌師←今川領国のみならず他国へも連歌興行を行い行脚／今川氏「在京雑掌グループ」の一人

⇒不明確な城の規模：「外城のめぐり六、七百間」「堀あり。嶮々」堀は幽谷のごとく

☞「掛川古城」(以下「懸河城」)で見当たらず  
…外城：本丸に対して外郭／根城に対して端城／本城に対して支城(日本国語大辞典)

↑事例：本記事

☞懸河城に外城＝外郭が存在

⇔「正保遠州掛川城絵図」

…写真！

↑正保年間(1644-1648)

↑戦国の「残像」

現掛川市総合福祉センター東の「切り通し」

⇔古称「鎌倉道」(戸塚和美氏教示)

☞「中世の道」を想起

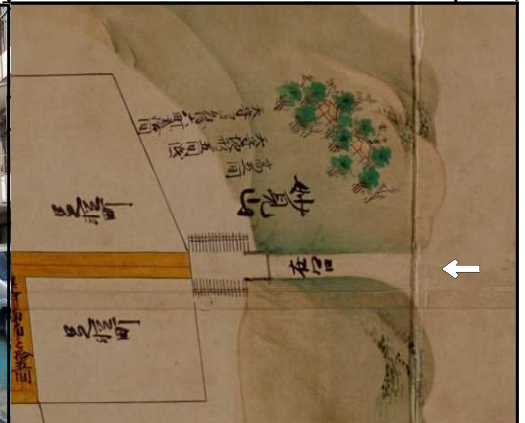
☞戦国人に 現況写真：戸塚和美氏提供

とっての「城」＝城主や武士たちだけのものではなく、城周辺に居住する人々が有事においては逃げ



史料1 宗長手記上  
大永二年五月、(中略)  
懸川泰能亭に逗留、此ころ普請最中、外城のめぐり六、七百間、堀をめぐり、土居を筑あげ、凡本城とおなじ、此地岩土と云物にて、只鉄をつきあげたりと云へし、本と外との間、堀あり、嶮々として居ても可なり  
〔静岡県史〕資料編7七九九号  
天永六年五月  
廿一日、懸川泰能亭。廿二日、則一折興行。  
はし鷹のこがへるはなかしやうり  
当城数年さまく普請。堀は幽谷のごとく、山は峯の椎檜しけく、よそめもた鷹の巢山ともいふへく、(後略)〔静岡県史〕資料編7九一〇号

写真：正保遠州掛川城絵図 (国立公文書館所蔵)



込む＝武家に保護を求める ← 2000年代以降の研究成果(by藤木久志氏) ⇔ 総構へ



↑ ex. 小田原北条氏 = 民衆による城の整備 ⇔ 領主の保護が前提

↑ 総構：戦国後半になって、城下の「都市整備」とともに造成

⇔ 城に対する民衆の考え方は、ほぼ普遍的と捉えて問題ないと想定

↳ 規模は不明ながらも、懸河城(含：外城)にも民衆が城に逃げ込む ← 前提として築城

→ 史料1の記述 = 懸河城の本城のあった大猷院殿霊廟近辺ではなく、かつて存在していた外城での普請も視野に入れる必要性

↑ 「ここから城」と案内者に示されれば、宗長はその通りに記載する

## 2. 懸河城の「城内」

▶ 文書に見えない城内の記事：21通の「城」関連文書から

→ 「大沢文書」の1通：興味を惹かれる文書の現形(模式図参照)と内容

⇒ 横内折による送信(文書の現形)

：秘匿性を高める封式

↑ 封：発信者が受給者への敬意を示す / 通常 = 文書の本紙を別紙で「包む」 / 本紙のみで発信する場合もあるが、受給者の家格が高い場合に工夫を凝らして敬意を示す

↑ 宛名：所書 = 小路名(現代の名字)記載

差出：今川家御一家の連名(ともに義元の「元」字拝領)

↳ 戦時であるため秘匿性を求めるのは当然 ← 情報漏洩の防止

⇔ 49のような「内通」は方いつでも起こり得る…自身・一族の生き残りのための行動

↳ 五大力尊：五大力菩薩の加護で、先方に無事に届くと信じられていた

↑ 五大力菩薩 = 封文菩薩とも(世界宗教用語大事典) / 金剛吼・竜王吼・無畏十力吼・無量力吼の5菩薩

↳ 糊付けの可能性 = 一部

刃物による切込がありながら、ウハ書き部の上下のみ手で破っている

↑ ② = 発信者による切込…封締用

⇒ 宛名：大澤氏 = 浜名湖東岸(村櫛)堀江城主 / 遠江国衆として存在…氏親段階から接触

史料2 小鹿元詮・瀨名元世連署状○大沢文書

(前略)当城(懸河城)弥々堅固候事候、相州か人数安房越国景虎出張候而、信玄退散実儀候、御本意之事者十日十五日之内歟与存候、爰元之儀取出於仕、弥々御備堅固ニ候、万事可有御心易候、其地鶴山之儀被仰合、御入魂可為専一候、委細者朝備・同下・同金員自比方可被申越之条、令疎略候、恐々謹言、

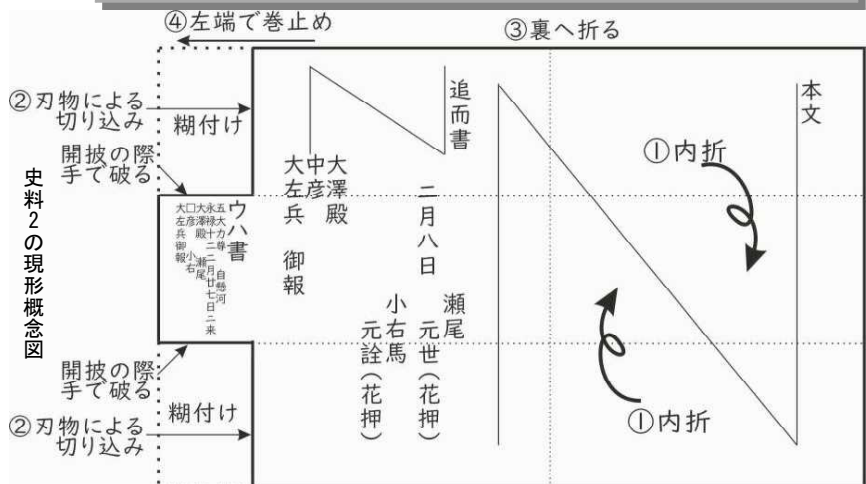
追而申候、えんせつ六百如此者、進之候、路次不自由之間、先少渡申候、重而可進之、前々□も御減之儀、如両所御筆立次第可相調申候、已上、

二月廿六日 (本字上巻)

大澤殿 御報  
中彦 御報  
大左兵衛 御報

瀨尾 元世 (花押)  
小右馬 元詮 (花押)

「(『戦国遺文』今川氏編二二八七号)



刃物による切込がありながら、ウハ書き部の上下のみ手で破っている

↑ ② = 発信者による切込…封締用

⇒ 宛名：大澤氏 = 浜名湖東岸(村櫛)堀江城主 / 遠江国衆として存在…氏親段階から接触





市)など何処でも通過させよ

⇒「懸河」印：今川氏の被官で、印章を使用している武将は泰朝のみ ← 宿老として存在

⇒発給時期：12月13日には駿府に信玄が来寇 ← ほぼ「臨戦体制」状態

⇔これ以前における印判状も存在せず←「この段階」だからこそこの印判使用？

↑遠州念劇＝永禄6年12月～同9年10月以前に終息(久保田2005)でも懸河は安定

…「はじめに」言及

⇒宛名：津留奉行中 ⇔ 今川氏一門かつ従属国衆葛山氏＝駿東地域で塩留(戦今2141)。

☞この前後の今川氏の文書＝徳川氏よりも武田氏に注視 ⇔ 引間城も落着

…塩留実施＝遠州念劇で津留奉行が設置された可能性

☞「津留奉行」という名称＝海上もしくは河川交通の要衝地で津留を実施した機関と想定

…二俣口・森口&奥山氏・天野氏の居点＝内陸⇒津留は河川交通に関与

↑奥山郷・二俣＝天竜川沿い⇒朝比奈氏の権限が懸河から両所に及び得た可能性

天野氏の拠点＝雲名←天竜川沿い…当地に津留実施⇒国衆領域への朝比奈氏の影響

…森＝太田川沿いの地点での津留？⇔天竜川・太田川の要衝地における津留の実施

⇒問題なく兵糧を廻送させようと文書を発給(奥山郷一犬居&懸河も想定内)

⇒兵糧の移送：食料の備蓄⇒発送

☞懸河一森・二俣ルート ⇒ 塩の道を想起(次ページ図参照)

↑相良から懸河一犬居一青崩峠一信州へ

⇨朝比奈泰朝の権限＝非常事態であったためかもしれないが、国衆の天野・奥山両氏の領域、さらには天竜・太田両河川に関わる広域であったと考えられる

→太平洋海運・東海道輸送の接点としての懸河城

…平時(＝安定時)における様々な物資の流通 ⇒ 朝比奈氏による確保・備蓄

▶半年に及ぶ氏真籠城の背景

### おわりに

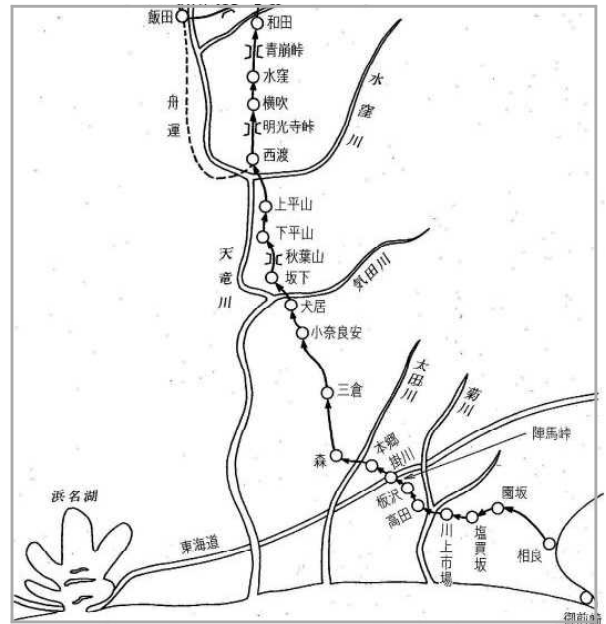
▶他大名への影響：武田氏にはほとんど影響なかった？←文書量一気に減少

↑(天正2年<1574>)11月4日付天徳寺宛／(天正3年)6月3日付清野刑部左衛門尉宛のみ

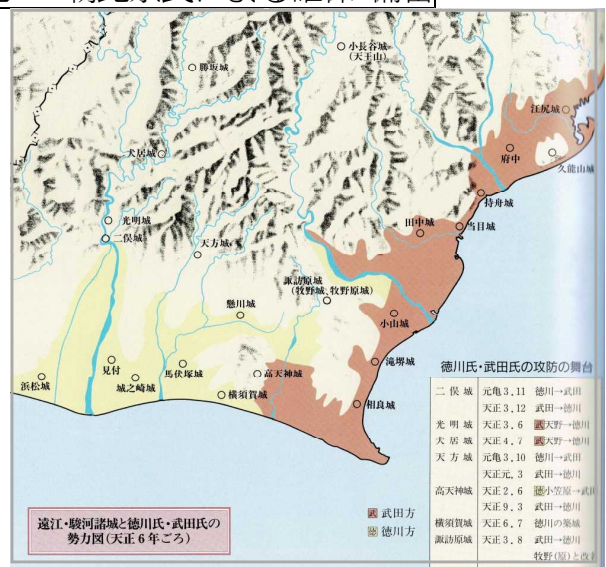
→徳川方拠城へ：石川家成入城 ← 西三河旗頭からの「転身」…家康にとって重要な城

⇒武田氏の求める城は高天神城？：高天神城の攻防

↑武田勢＝海岸部の領域化(『図説 静岡県



「塩の道」概念図(『掛川市史』上巻P610)



天正6年頃の武田・徳川勢力図(『図説 静岡県史』P115)

史』P115)

- ☞ 経済面を考えたとき、水運の拠点としての高天神城とセットでなければ利益は少ない  
↑ 水運による膨大な輸送品の売買取得ることのできる利益の損失
- ☞ 南北の防衛ラインを考えたとき、東からの侵攻を防御するためにも、地理的に高天神城とのセットが望ましい⇔家康：高天神城を勝頼に奪われて横須賀城(掛川市)築造  
↑ 横須賀城：防衛ライン確保のため確実に必要な南部の城として機能
- ☞ 今川時代：朝比奈泰能＝寿桂尼を通じ、今川家の準一門に  
高天神城の福嶋助春＝氏親の別妻の外戚となり、同じく今川家の準一門に
- ☞ 今川時代：氏親・寿桂尼・氏輝段階で両城を押さえることができていたため、経済的・軍事的にも懸河城の存在は効果的だったが、武田・徳川による高天神城の「取り合い」で、相対的に懸河城もおそらく経済的にマイナスに ⇔ 軍事的には重要拠点
- ➔ 懸河城＝高天神城とのセットで存在することで、(経済的にも軍事的にも)より大きな「利益」をもたらす ← 信玄・勝頼はそれを理解して高天神城にこだわった……？

### 【主要参考文献】

- 相田二郎「古文書料紙の横ノ内折とその封式とに就いて」(寶月圭吾・高橋正彦編『日本古文書学論集』2総論Ⅱ、吉川弘文館、1987年／初出：1941年)
- 有賀競：文／写真・イラスト：野中賢三『秘境はるか塩の道秋葉街道』(有賀競、1993年)
- 大石泰史「今川氏家中の実態―「奉行衆」「側近衆」「年寄中」の検討から―」(戦国史研究会編『戦国期政治史論集 東国編』岩田書院、2017年)
- 同 『城の政治戦略』(KADOKAWA、2020年)
- 掛川市 『掛川市史』上巻(同市、1997年)
- 黒田基樹『戦国期東国の大名と国衆』(岩田書院、2001年)
- 静岡県 『静岡県史』通史編2中世(同県、1997年)
- 同 『図説 静岡県史』静岡県史別編3(銅剣、1998年)
- 野澤直美・高木翔太・福島康仁・高橋孝・村橋毅・高野文英「硝石製造法の史的調査と実験的検証に関する研究―わが国における3種の硝石製造法の比較―」(『薬史学雑誌』55-2、2020年)
- 藤木久志『城と隠物の戦国誌』(朝日選書、2009年)
- 丸島和洋「今川氏家臣団論」(黒田基樹編著『戦国大名の新研究1 今川義元とその時代』戎光祥出版、2019年)

### 【写真提供】

- 『馬伏塚城と高天神城展』展示解説(袋井市歴史文化館、2015年)  
<http://fukuroi-rekishu.com/siryu/20150114130902.pdf>
- 山梨県ホームページ／甲府城研究室(埋蔵文化財センター)／甲府城内探検／煙硝蔵  
[https://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/ko-fu\\_zyou/jonai\\_tanken/jonaitanken\\_enshogura.html](https://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/ko-fu_zyou/jonai_tanken/jonaitanken_enshogura.html)